

INTELLECTUAL HISTORY の範圍々

方法について

中 村 正 雄

さいきんアメリカでは Intellectual History とよばれるきわめて包括的な新しい型の歴史研究がさかんに行われている。これは、従来の哲學史、思想史、道德史をその主要な部門として含みながら、さらに文學、宗教、藝術、政治、經濟などの分野の歴史をも重要視する一種の社會史もしくは生活史であり、非常に廣い意味での文化史でもある。これの研究はげんぎいでは歴史學の一作業領域として確立されているようである。しかも、その研究、教授は、カーティ (Merle Curti) やガブリエル (Ralph Gabriel) のような歴史學者によつてなされているだけでなく、ハワード (Leon Howard) のような文學者、ホワイア (Morton White) のような哲學者、ブリントン (Craine Brinton) のような政治學者たちによつても行われつつあつて、ある意味では、人文諸學の綜合史が企てられている、と言えるかも知れない。

この Intellectual History という研究分野の存在が、合衆國で認識されはじめたのは、第一次大戦に少しさきだつてロビンソン (James Harvey Robinson) が、コロンビア大學で「ヨーロッパにおける知識階級の歴史」という講義をしたこと、また一九四〇年にニュー・ヨークで Journal of the History of Ideas という季刊誌が發行された、という二つの出來事によつてであつた、といわれる。さいきん十數年のアメリカ史の動向を特徴づけるものとして、國民的自覺ということがあげられるが、Intellectual History はあきらかにこのアメリカの土壤における知性の發達の反省の一面をなしている。Intellectual History は、したがつて、まず、アメリカにおける知性の發達の歴史として發足し、さらに、一般に西歐世界における知性の歴史の統一的把握へとその主題を擴大している。

ここに Intellectual History とよぶものによつて内容的に何が意味されるかは、研究者により多少の相違があるが、要するに神學や哲學のような系統立てられた思想の歴史だけでない

く、ひとびとが保持し育成して来た、かならずしも一定の型に入らない、思想、知識、價値の歴史をさしているのである。

Intellectual History はさういふものの發達を助成し、あるいは阻害した、諸要因を考え、また、いかに思想、知識、價値が、自然的環境、經濟、政治、社會制度などによつて影響されるか、を明らかにしようとしている。そしてその點では、思想の組織を徹底的に分析することを旨としたヘリーの『進歩思想の歴史』(J. B. Bury: *History of the Ideas of Progress*, 1921) やラズヴェイの『存在の偉大なる連鎖』(A. O. Lovejoy: *Great Chain of Being*, 1936) のよきな努力も見出されるが、さういふ領域よりも、むしろ系統立たず一定の型に入らないが、しかし莫大な数の民衆のこころのうちに存在し、かれらの行動に示されている諸觀念 (Ideas) の生育の歴史の研究に主力が注がれているようである。マール・カーティ教授もその代表作『アメリカ思想の生長』(Merle Curti: *The Growth of American Thought*, 1943) にさういふ立場をとる一般民衆にとつて、文化享受の機会がしだいに広まつて来た跡を入念に調べることによつて、はじめてアメリカ思想の生長を理解しようとする態度をとつてゐる。

ブリントン教授の注目すべき通史 (Craine Brinton: *Ideas & Men, The Story of Western Thought*, 1950) はこの立場に立つて、主題を西歐思想史全體に擴大したものである。それは哲學者の思想 (Ideas) と荷の人たち (the man in the street) のそれとの關係を明らかにしようとすることを課題と

している。それは、「哲學者たち、知識人たち、思想家たちの思想 (Ideas) と文明の仕事遂行するいく百萬のひとびとのじやいの生き方 (the actual way of living) とのあいだの關係」を見出そうと試みている。それはあたかも臨床家の態度をもつて、生きた人間のあいだにはたらいっている思想 (Ideas) を研究しようとする。それゆゑ、臨床家が患者の健康を願うがゆゑに、その良き症状ばかりでなく悪しき症状にも注意するやうに、従来の思想史がとりあげなかつたようなことで、研究對象にしてゐるのである。また、この立場は、思想を思想そのものとしてよりも、知識階級の意見の範圍 (the climate of opinion) に入りこんだ哲學的業績に重點がおかれてゐる。あるいは、サアアヴァイル (D. C. Somervell) の規定を用いるなら、Intellectual History とは「思想の歴史」(a history of thought) であるよりもむしろ「意見の歴史」(a history of opinion) であるとも語られよう。

しかし、さういふ Intellectual History の主たる對象はただ知識階級の意見だけにかぎられてゐるわけではない。ポーマー教授は Intellectual History を狹義に、知識階級のなすこと (doing) やこと (saying) を書くと (writing) の歴史と解しているようだが、さういふ規定は西歐思想史全體に關して研究するさうにはやや狭すぎる。といふのは、ヨーロッパでも十八世紀までは讀書階級のようなものは存在しなかつたが、しかし書物を讀まなかつた人々たちでも、正、不正の觀念はもつたし、また、あらゆる種類の信條、信念、迷信、傳統によつて

動かされていたのであり、そして、そういうものこそまさに Intellectual History の対象であるからである。もつとも、Intellectual History における、こういう対象へのアプローチの仕方は、論理的整合性を至上命法とする哲學史におけるそれとは、おのずから相違してはいるが。

要するに、Intellectual History は、諸觀念 (Ideas) が時代において、相互にどのように發展し、關連したか、それが特定の時代にかにして、また、なぜ、出現し、擴大し、衰退したか、そして、それらは具體的歴史的狀況にたいしどのような効果をもつたか、という問題を、きわめて包括的な觀點からどこまでも科學的史學の立場で研究しようとするのである。

このようないわば縦の時間的系列における包括的考察の態度とならんで、いわば横の空間的系列においても、從來の人文科學や社會科學の分類の枠に入らないような包括的な考察が見られる。たとえば、經濟現象の解明を、人間行動 (Human Action) としうより大なる次元から統一的に説明しようとしている「ミゼス (Ludwig von Mises) のような經濟學者の方法がそれであつて、かれは、「社會組織の基本的論題に關する經濟學的思考ならびに政治學的論議の理段階においては、經濟 (catallactic) 問題だけの處置を孤立してはもはやとりあつていかならぬのである。この問題は人間行動の綜合科學の一部にすぎないものであり、そしてそのようなものとしてとりあつたわれなければならぬ」と主張してゐる。

Intellectual History をめぐると、このような人文科學、

INTELLECTUAL HISTORY の範圍と方法について

社會科學における新らしい動向は、さいきん、わが國でも、ようやく問題にされはじめてゐる、いわゆる從來の諸學の限界領域が諸學の渡邊そのものによつて、新たな學の作業領域として意識されはじめたことの現われである、と思われる。たとえば、リントン (Ralph Linton) 教授らの提唱にかかる「人間科學」(The Science of Man) も、「人間」を超時間的、超空間的に把握する從來の哲學的實體概念に代へるに時間的、空間的特定諸條件のもとにおける諸「作用」のいわば「積分」として「計算」しようとするもの、と言えよう。またサイバネティクス (Cybernetics) などもあきらかに從來の科學の分類のどの枠にも入りきれないものがある。人文科學もまた、自然科學とテンポは異なるとはいへ、進歩してゐるのである。Intellectual History も從來の哲學史、思想史、道德史などの枠には入らないが、けつして本來は無視されるのを許さない領域に光をあてようとしてゐるものなのである。

二

さて、ホーマー教授によれば、Intellectual History の主要問題として、つぎの四つがあげられてゐる。第一に、特定の時代の「意見の範圍」(the climate of opinion) であるとは時代精神 (Zeitgeist) の問題。各時代は、その時代に特有の知的範圍内で、動き、かつ、特有の世界觀 (a world view) をもつ。このような知的範圍を見出すことは、少數の思想家の思想をとらえるのよりも容易ではない。しかし Intellectual His-

tory は少數の思想家や「名著」ばかりを對象とすべきではなく、「時代のための小冊子」(パンフレット、宣言、演説、説教、小説(善いものも悪いものも)、エッセイ、手紙、私的回想などをとりあげる。これまで「名著」と二流以下の著作との正確な關係は十分に分析されたことがなかつた。たしかに、一時代の精神 (mind) はそれほど等質的 (homogeneous) ではなく、或る枠の内では同じ前提の上に立つているが、この枠はその内いろいろな變異 (variation) を許容している。たとえば、エリザベス時代のイギリスでは、アングリカン思想とピューリタン思想では宗教的原則を異にし、また、ピューリタンのあいだでも神の言葉は一樣には受けとられていなかつたことは注意されねばならない。

なお、一時代に特有の時代精神や意見の範圍を見出すのは、つぎのような危険もある。それは、Intellectual History は歴史の横斷面をとらえねばならないのだが、われわれが時代 (age) とか、時期 (period) とかよぶものは、過去の成果と未來の萌芽とをふくんでいる。そして、歴史は過去が消えないうちに同時に未來が始つていて、という動き方をしているのであつて、この動きを忘れると、ブルクハルトがしたように、一時代(たとえばルネッサンス)をあたかも完成したもののようにな固定化し、それを過去から截然と分けるような誤りをおかすのである。

また、ギリシア、ローマ、あるいはルネッサンス、の文化理念、もしくは近代的進歩の觀念を固守して、各歴史的時代のう

ちにおけるそういう理念や觀念の現存の度合に應じて、時代を評價するのも、「文化に囚れた」誤りである。トインビー (A. J. Toynbee) がしているように、歴史研究の單位 (unit) として、國民 (nation) よりも文明 (civilization) と「語」語を選ぶことは正當であるが、その同一文明内にも空間的差異がある。たとえば、イタリアのルネッサンスと「アルプスの此方」のそれとは異り、宗教改革の現象形態もドイツ、スイス、イギリスでは異り、十八世紀の啓蒙思潮も、フランス、イギリス、ドイツでは異つてゐる。

この複雑な問題の解決にたいして、「成功すべくもつともよく計算された方法」、すなわち「正しい處置法」は、「思想の異支脈の相互關係の研究」(the study of the different branches of thought in relation to each other) である。この種の比較研究は少ない。研究は開始いらる一世紀にも及んでいない。自然科学の研究が必ず特定對象に限定されるように、時代精神の形成要素を把握するためには、特定の時代を指定し、その時代の思想の異支脈の相互關係を考察しなければならぬ。箇例的な學的存在、思想の區分、思想の一領域から他領域への轉移 (cross over)、異領域の異水準での發達、知識人の多くが終局的には一致する假定や前提、この前提についてのテンションの存在、共通の知的な枠内でのものとも重要な變異、一時代においてのこの種の問題に答えることによつて、時代精神の本性についての假説がつくられるだろう。そして、このような假説は時代が異なるにつれて當然異なるであろうが、そういう相

違は、時代精神という一般的問題の潤點からのみ意味をもつことである。一時代の研究が示す廣い型の假説は、すべての時代にたいしてほぼ同じく通用するであらう。

第三に、因果關係 (causation)、すなわち知的變化の諸原因の問題がある。時代精神はたえず變化し、異なる二つの時代の關心、認識方法、自然觀、人間觀、社會觀は異なるが、このような轉形 (transformation) はいかなる過程によつてできてきたか。このさい、解答は、獨創的な精神の創造力に主導性を認めるいわば「天才說」と、社會經濟的要因の精神にたいする決定力を主張する史的唯物論的方向とに、大別されるが、Intellectual History は、新しい思想 (Idea) の形成のうち、この兩方向の錯綜するのを見、知的起源と物的起源との双方を認めて、その成全的連關 (integral relation) の構造をこそ問題とする。必要なことは、哲學的直觀の一般化ではなくして比較的短い時期にかんする知的轉形の過程と動態 (Dynamics) との歴史的分析である。あまりに長い時期を整合的に説明しようとするには無理がともなうから、二つの適當に近接している時代を選んで、そのあいだの知的轉形を促進する要因を考察することにより、知的變化の一般的法則が見出されよう。

一時期から他の時期への變化の過程の外的歴史は記述しやすすい。たとえはさいきん數百年のイギリス思想の變化についての研究からはつぎの歸結がえられる。

(i) 知的變化は激變的 (cataclysmic) でなく、漸進的 (gradual) である。 「新」思想 ("new" idea) は、通

INTELLECTUAL HISTORY の範圍と方法について

常は、傳統的な知的枠内で、古い思想と結びついて成長する。(ii) 一五五九年から一六八九年にいたる宗教的寛容の歴史は、思想の進歩は必ずしも連續的でないことを例證する。

知的變化における過程の問題よりもさらに複雑な動態 (Dynamics) の問題については、通常、知的變革 (innovation) は内外の影響の結果と、現に生起しつつある出來事 (events) の集積 (congeries) の結果との双方の面から、研究しよう。これらの知的出來事を決定すべき主要點は、新しい思想 (Ideas) が生じるさいには、それがそれ自身の力によつて社會的環境から獨立に生起したか、あるいは、そうでなかつたか、ということである。思想がきわめて限られた意味においてはそれ自身の生命をもつこともあれば、「新」思想が「舊」思想から演繹的に出てきたこともある。一般に成功した思想 (ism) を評價するには、ひとは、いわばその種子とともにその土壤や風土の條件をも分析しなければならない。與えられた一時期の歴史的出來事の至復合體を分析しなければならない。もちろん、一時代から他の時代への時代精神の變化は少數の個人によつてよりも、多數者の知的運動に負うことの方が多し。個人は連鎖のうちの一環として、かれらよりも大なる運動の一部として見らるべきである。

また思想の傳統的な型が知的變化を促進するのに演じる役割も研究に値する。たとえはスコラ哲學が近代科學の形成に演じた先驅的役割が想起されるべきである。知的變化の動態は、きわめて複雑であり、あらゆる種類の出來事、新舊の諸思想 (Ideas)

が錯綜し合つて新しい「意見の範圍」がうみ出される。このうち Intellectual History の課題は、すべての出來事が思想の特定の變化にいかにか關連するか、これらの出來事はどのようにして、また、なぜ、他の變化ではなくしてこの變化を導き出したか、を明らかにすることである。

第三に、思想 (Idea) やイデオロギーが行動の世界に及ぼす効果 (Effects) の問題がある。これは主として、思想が大多数の非知的大衆に、どの程度に、そして正確にはどのようによつて作用するか、といふ問題である。この問題については、たとえば『社會契約説』がフランス革命を惹きおこした、というような論をすれば、哲學者のうちには「思想が歴史をこく」という議論をするひともいる。思想と政治的社會的出來事とのあいだの因果的連關の問題は、嚴密に再考を要する問題である。もちろん、正確には、思想は、他の要因とともに、「歴史をつくる」と修正されるべきである。思想は、行爲の慣習の様式のかたちで、社會を強化したり、新しい行爲様式をおしすすめたりするが、しかし、社會内における少數の個人とは別のものとしての社會全體が、その社會の構成員の思想により、いかに動かされるかが、問題である。大多數の者 (majority) は、『アンナ・カレーニナ』にけるオブロンスキーに典型的に示されているように、新聞の主眼をおのれの主張とし、多數者の意見をおのれの意見とする。多數の者が意見を變えればかれも意見を變える。したがつて、嚴密に云えば、かれが意見を變えるのではなくして、いわば大多數者がかれのうちにおいてかれら自身を變えるので

ある。さて、いつたい、多くのオブロンスキー的存在は、いかにしてかれらの意見——これは相當の程度に行動の基礎となる——を習得するのか、といふ問題は、歴史學が教育學にかなり接近する領域である。しかし、この領域の研究からは、一時代の眞に獨創的な知的活動は大多數者とはあまり關係がないこと、思想が大衆の意識に滲透する途中で、いわばその「稀薄化」ないし誤解が行われること、が明らかになるであろう。とにかく思想の世界と行動の世界とのあいだのギャップを橋渡しすることは、ここに殘された仕事である。

第四に、Intellectual History そのものが、いかなる効用 (use) をもつてゐるか、といふ問題。Intellectual History は、自然科学が自然現象を豫報するのと同じ程度には、未來を豫言できないからといつて、現代の問題に何のかわりもない、とは云えない。少くとも、三つの効用が考えられる。

(i) 歴史學は、終局的には人間性についての反省の學であるから、前を見ることは、後を見るようなわけには行かない、と云うひともあるが、西歐思想の主要傾向を研究すれば、近い將來において、西歐人が考へるであろうことの外の限界、一般の枠はつかめるであらう。とくに、近代における思想の型の研究により、定着しつつある世界觀が見分けられるであらう。そして、そういう世界觀の支持者たちが、與えられた狀況において、いかに行動するかを豫見することは困難ではない。

(ii) そこに、豫見の可能性とともに、統制 (control) の可能性も示されている。われわれは批判的な時代に生活している

が、この態度による近代思想の研究は、現代の眞の知的問題を浮彫にする。それは、われわれに流行や氣まぐれと、永續的價値とを區別すべきことを教える。その知識はまた、われわれの生き方を勇敢にし、知的「行商人」(hucksters)や思想の閉鎖的體系にたいして防衛させ、「自由からの逃走」によつて特徴づけられる世紀に生さるわれわれに科學的精神を保持させる。

(iii) Intellectual History は歴史哲學の形成にも役立つ。ランケくらい、歴史學者は「事實」の探求に没頭し、歴史哲學には冷淡であつたが、事實とともに事實の意味も探求に値する。西歐の歴史の進展の方向の決定は、決定者自身の價値觀や信仰に深く關連しようが、それは、放擲されるを許さない問題領域だ。それは高度に複雑な資料に、きわめて限られた時期に取組むのだから、解決はおのずから試験的 (tentative) な性格をとらざるを得ない。以上が、ゴーマー教授により Intellectual History の問題とらてあげられてゐるものである。

III

この Intellectual History を方法的視角から検討しよう。Intellectual History の作業態度が tentative であることは、歴史學家が「教えることは問題を設定すること」という原則にもとづいてゐるのであり、従來の「教えることは主張すること」という原則に對比されるべき、ちよひしい差異をなしている。こゝにも民主的社會の成員は、いわば奮闘がしたいに存在に變りつつある過程のうちで生きており、民主的社會にお

いては、個人がみずからの判斷によつて、この變化の方向を決定しなければならぬわけである。Intellectual History はそういう決定に端的に寄與しようとするものである。

それは哲學史、科學史、道德史、文學史のような確立した史的研究とはおのずから區別される領域で作業する。いいかえればそれは、抽象的觀念そのものとともに、あるいはむしろそれ以上に、その觀念が普通のひとびとのところにいかに滲透したかに、注目する。プラトン、カント、ヘーゲル、ニーチェの思想とともに、それが、ひとびとどのように受け入れられたかという問題——これまで本格的研究の對象となることが少なかつたが——それが Intellectual History の問題である。このような研究は従來は前者の領域については哲學史、後者のそれについては社會史とよばれて來てゐるから Intellectual History とは、簡単にいえば、哲學史と社會史とを兩極とする資料をとりあつかうともいへよう。

この「思想 (Idea) の傳達可能性という觀點から、「思想の役割」(the role of ideas) という概念が Intellectual History の主導的觀念として用ゐられてゐる。まさか、この思想 (Ideas) とよばれるのは、表現にまたげられ、効果をもつたもの、という意味においてであるが、このような思想を區分する方法として、プリンソン教授があげてゐる、累積的知識 (cumulative knowledge) と非累積的知識 (non-cumulative knowledge) との區別は注目し得ると思ふ。前者は、自然科學においてのように、蓄積され、しだいにきずきあげられて

來た知識で、もとのストックにきわめて多くのものがつけ加つて出来上つてゐる。後者は、文學者が人間について書くときのように、蓄積が容易ではなく、直觀的で、人類の文化はじまつていろいろ、あまり變化していない知識である。しかしこの種の知識も嚴密には、緩慢なテンポによつて蓄積されてゐるともいえる。この區別は往々にしてひとびとが考えるように前者が後者に優るといふ意味ではなく、ただ兩者がその累増 (cumulativeness) の性質に關して相違していることを意味するにすぎない。たとえば、社會科學は、事實の自然科学的な蓄積 (accumulation) であるばかりでなく、事實の妥當的解釋 (valid interpretation) の蓄積でもある。また、哲學においては、進歩はなく、われわれが歴史から學ぶのは、われわれが歴史から學んでいないということだ、という皮肉な議論もあるが、ギリシアの哲學と現代の哲學とを少くとも方法的に、同じである、とは言えない。

Intellectual History は累増的知識と非累増的知識との双方をとりあつかう。一般的には、前者は、終局的には物的檢證に依據しうるのにたいし、後者はそれにたえないので、無効か、無意味視されがちであるが、しかし物的檢證だけに依據するリアリストは、かれらが非難するところの非累増的知識に依據するアイディアリストとあまりちがわぬ單純さをもつてゐる。というのは、人類の思想の歴史においては、「あるべきこと」は「あること」と等しく實在的で、當爲と存在とは相互に影響し合ひ、一つの過程の部分であつて、相互に獨立的ではなくし

たがつて矛盾するものとは云えないからである。當爲と存在、理想と現實とのギャップをうずめようとする人類の努力の跡こそ Intellectual History の追求する課題なのであり、この課題は、たんに當爲を否定するリアリストによつても、たんに存在を否定するアイディアリストによつても遂行されない。人間は理想と完全に一致すべく行爲するものではない點ではリアリストが當つており、理想について考えることは何の効果もない活動ではない點ではアイディアリストが當つてゐる。この點で、Intellectual History は、史的唯物論的立場とは異り、生きた人間社會の歴史をおしすすめる力として、「アイディア」と物質的要素との双方をみとめる。

ところで、二十世紀中葉のわれわれは、人類の過去の言動に關して、何らかの意味で考慮するに値する、きわめて莫大な数の記録、根本資料をもつてゐる。學者の一生は、かれがいかに勤徳であつても、これらの數十の一をも讀むべくあまりに短い。そこで、實際問題として、それらのうちから、重要なものと、そうでないものとの批判的な選擇が行われるわけである。このことは、きわめて平凡なことながら、けつして重要でなくはない基本的な問題である。この選擇の基準は Intellectual History においていかに考えられてゐるだろうか。プリンストン教授があけてゐる、いくつかの型 (pattern) について検討した。

第一、げんざいアメリカでもつともポピュラーであるところの、こんにちのわれわれにとつて「生きているもの」(“living”

for us today) を選び、「死んでいるもの」(“dead”) を斥ける、というプラグマティックな原則。しかし、この「生きてゐる」によつて、何が意味されるかは、必ずしも一義的ではない。それは、まず、「大多数の者により眞理として受けとられた」ということを意味するであろうが、このことは非累積的知識の領域において、必ずしも容易には一致を示さない。たとえば、プラトン哲學の現代的生命については、それをいぜんとして最高の睿智と考える者から、まつたくのナンセンスと考える者までの兩極のあいだに評價は分かれてゐる。もちろん、哲學者仲間ではなく、一般知識階級のあいだであるが。また、「生きてゐる」によつて、われわれに「身近かな親しみのあるもの」(familiar) を、「死んでゐる」によつて、われわれに「疎遠な親しみのないもの」(strange) を意味することもあろう。しかし、strange なものでも「生きてゐる」ものもある例として、ソポクレスが書いたアンティゴネの、兄に對する行動を、プリントン教授はあげてゐる。そして同教授はこの原則に對して、賛意を表されてゐないが、しかし、この原則は、第四の「方向」の概念と結びつけば、必ずしも斥りぞけらるべきものではないと思つた。

第二、現代の教養ある民衆により「古典」として、すなわち「偉大な思想」として、あげられてゐるものを選ぶという原則。しかし、これはむしろ哲學史の仕事であり、Intellectual History の作業領域としては狭すぎる。

第三、自己の確信もしくは信仰を歴史過程のうちに再確認し

ようとする原則。たとえば、アウグスティヌスの歴史哲學的方法論的意義は、それいこのあらゆる歴史哲學の原型をなしてゐるともいえるので、これは、Intellectual History——として一般に歴史——が累積的知識の體系であるとともに非累積的知識の體系でもある以上、「科學的」歴史觀がまつたく無視するよ

うに、無意味なものではない。

第四、西歐二千年の、あるいはもつとも狭く嚴密には近代三百年の、思想の歴史のうちには、やはり進行の一定の方向が見出される。それは一言で表わすならば、理性的なものが自己を貫徹して來た方向であり、われわれは結局この方向に沿うもの(たとえば、人間の尊嚴、眞正の民主主義等々)を促進し、この方向に沿わぬもの(たとえば、ファシズム、ミリタリズム等々)を斥けるべく、選び、かつ努める、という原則。われわれもまた、プリントン教授とともに、「ソフィストから論理實證主義者にいたる」西歐の思想の歴史のうちには、やはり、正邪、善惡、美醜の價値について、ただ「それは趣味の問題だ」として各人に委ねることを許さない。「方向」(line) が——必ずしも明確とはかぎらないながらも——存在すること、いいかえれば、價値の問題についても理性は無力でないこと、を認めた。この點、現代アメリカの哲學者、知識人は、まつたく十八世紀の啓蒙主義者と同じく、簡明直截に合理主義的である。アメリカの一哲學者はかれらの「理性にたいする信頼」の題目のもとに民主主義の防衛を説いてゐる。^(九)われわれは、むしろこの「單純」をこの學ぶべきではなからうか。

この「方向」の概念は、しかし、廣くアングロ・サクソン哲學においては、ダーウイニズム、スベンサー哲學を経て確立している「前提」のようにも思われる。たとえば、ホップハウス (T. T. Hobhouse) においても、社會學的な比較的方法の根柢に明らかに、進化の「方向」という考えが見出される。⁽¹⁰⁾

このような方法による、道德思想 (Moral Ideas) の研究がアングロ・サクソン世界においてはかなり有効であつたのであるから、これをさらに擴大して、こんにちの世界の人間が、それによつて生きてゐるような道德や價値の歴史的把握にまで適用されないだろうか。それは比較的單純な「線」を追求することによつて、必ずしも容易ではなからうが、豫想するよりも困難ではないかもしれない。たとえばプリンストン教授の「Ideas of Men」は近代世界を貫く三つの線として、「ヒューマニズム」「プロテスタンティズム」「合理主義」をあげて、相當の程度に成功してゐるようである。あるいは、問題を縮少して、こんにちの日本人がそれによつて生きてゐる價値の系譜を解明することも一つの急を要する問題であるように思われる。

四

さつに、Intellectual History と史的唯物論との異「同」を簡單に比較検討してみたい。前者は、終局的には、プラグマティズムに立脚してゐるのであるから、史的唯物論と方法論的に「異なる」のは當然であるが、案外「同じ」ような性格も見出される、と言えなくもないようである。

まず異なる點について。第一に、史的唯物論においても上部構造が下部構造を規定する面が有過されてはならないが (周知のようにな、とくにエンゲルスにおいて)、第一次的には下部構造による上部構造の規定に重點がおかれてゐるのになし、Intellectual History においては、逆に、下部構造による上部構造の規定を認めつつ、上部構造による下部構造の規定により強く比重がおかれてゐる。すなわち Intellectual History においては、「偉大な思想」がいかにして平均人の思想にまで滲透したか、また前者がどの程度に後者を代表するか、というイデオロギー内部の相互關係の解明が主要テーマとなつてゐるが、史的唯物論においては、このようなものをイデオロギーとして一括し、そのイデオロギーが下部構造によりどの程度に規定されるかが主要テーマとなつてゐる。

第二、兩者ともに「現在」に重點を置いて、「現在における過去」を把握してゐるわけだが、このさい、この「現在」を生きたる主體として、Intellectual History においては、近代的、原子論的、等質的な市民としての個人がたゞ複數のかたちで、「われわれ」として意識されてゐるのになし、史的唯物論においては、その現在の主體としての「階級」概念が明確に自覚されてゐて、すべての研究は終局的には階級の利益のためになされる。

第三、Intellectual History は、過去から現在までの思想的傳統にたいして、がいして、半面肯定し、半面否定するといふ改善主義 (meliorism) 的傾向が強いが、史的唯物論におい

ては、ほぼ全面的な革命 (revolution) 的傾向が強い。

つぎに、同じ点について。第一、思想や觀念を、ただそれ自身として、その本質をその系譜において探求した「哲學史」や「思想史」や「精神史」に比して、兩者ともに、その思想や觀念が生育し、發達し、衰退した土壌としての社會を地盤として把握し、それとの連關において、また社會における、もしくは社會の一面の表現として、思想を見る點では、同一の態度が見られる。とくに史的唯物論の發展形態である、アンリ・ルフェーヴルのいわゆる「思想の社會史」と比較するとき、このように云えると思つ。

第二、また、兩者ともに、いわば「現在の優位」を認める點では、ランケ的な「過去が本來いかに在つたか」を知ろうとする認識至上主義に對して、「現在のための歴史」といふいわば「實用的」性格においては同一である、と云えよう。わが國の「史的唯物論者」は、「おおよそ、思想を、ただ思想として、あれこれの思想家の著書などを唯一のたよりに、その系譜を追うといふことでは、ほんとうに、その思想の本質にふれることもできなければ、これを現代に生かして、現在のわれわれ自身の生活をかめ、社會をよくしてゆくといふことにも役立たない。そして、それがなければ、われわれは、なんのために思想史を勉強するのかわからないのである。」と述べている。

われわれは、もちろん、このような態度のもつ眞理性を認めるのに吝かではないが、これにたいしてはただ疑點が一つ残るのみである。それは、Intellectual History にたいしては、

INTELLECTUAL HISTORY の範圍と方法について

史的唯物論にたいしても云えることであるが、「市民的個人たち」のためであれ、「階級」のためであれ、おおよそ何らかの「ために」のみ思想史の研究が行われるとき、いいかえれば、ランケ的立場が輕視されるとき、そのような研究は、もし、その研究の歸結が、すなわち論理的必然性が、その「市民的個人たち」や「階級」に不利益を示すときもなおその研究をすすめるであらうか。おそらく、それはありえないであらう。そうとすればこの二つのまったく異なる史的研究方法は、「現在」のために過去の事實を、場合によつては、曲げるかもしれない危険なむかむものといえないであらうか。しかし、そのような危険にもかかわらず、これらの方法のもつ積極的有効性はやはり正當に評價されなければならないであらうことはもちろんである。(一)

註(一) F. L. Baumer: Intellectual History and its

Problems, The Journal of Modern History, Sept. 1949, Vol. XXI, No. 3, p. 191.

(二) C. Brinton: Ideas & Men, 1960, p. 7.

(三) L. v. Mises: Human Action, A Treatise on Economics, 1949, p. 10.

(四) F. L. Baumer: op. cit. pp. 192-203.

(五) それゆゑに、吉川英治作『宮本武蔵』も思想の科學的研究の對象となるのである。

(六) この概念は、ほとんどもうてと言つてもよいほど Intellectual History 關係書の方法論の一章または一篇をなつてゐる。

- (十) C. Brinton: op. cit. pp. 13-14.
 (十一) C. Brinton: op. cit. pp. 22-26.
 (十二) W. Frankena: Our Brief in Reason, in Papers of the Michigan Academy of Science, Art, and Letters, 1943, Vol. XXIX, pp. 571-586.
 (十三) L. T. Hobhouse: Morals in Evolution, Vol. II, Chap. VIII, The Line of Ethical Development, pp. 258-284.
 L. T. Hobhouse: The Rational Good, Chap. VIII, Implication, pp. 193-234.
 (十四) 本田善代著『社會思想史』序文一頁。
 (雜著) 近畿大學教養部「倫理學」教授

新着外國雜誌所載論文一覽

— 哲 — 學 —

- THE JOURNAL OF PHILOSOPHY, 1955 (Vol. LII).
 Linke, P. F.: The Scientific Attitude Indispensable for Philosophy (No. 1, Jan. 6).
 Fen, Sing-Nan: Judgment on Morality and Moral Choice (No. 1, Jan. 6).
 Magid, Henry M.: An Approach to the Nature of Political Philosophy (No. 2, Jan. 20).
 Schulz, Edward: Syntax of Inherent Value (No. 3, Feb. 3).

- Wells, Donald A.: Phenomenology and Value Theory (No. 3, Feb. 3).
 Wilson, H. Van Rensselaer: Causal Discontinuity in Fatalism and Indeterminism (No. 3, Feb. 3).
 Kennedy, Gail: The Hidden Link in Dewey's Theory of Evaluation (No. 4, Feb. 17).
 Hartshorne, Charles: Process as Inclusive Category: A Reply (No. 4, Feb. 17).
 Kurtz, Paul W.: Naturalistic Ethics and the Open Question (No. 5, March 3).
 Simmons, James R.: Super-, Sub-, or Pseudo-Naturalism? (No. 5, March 3).
 Cerf, Walter: Existentialist Mannerism and Education (No. 6, March 17).
 Rieser, Max: Three Stages of the Contemplation of Nature (No. 7, March 31).
 Black, Virginia: Good Reasons and Reasonable Acts (No. 7, March 31).
 Ambrose, Alice: Wittgenstein on Some Questions in Foundations of Mathematics (No. 8, April 14).
 Hintz, Howard W.: A. N. Whitehead and the Philosophical Synthesis (No. 9, April 28).
 Waters, Bruce: The Past and the Historical Past (No. 10, May 12).
 Williams, Donald C.: More on the Ordinarity of History (No. 10, May 12).
 SCHOLASTIK, 1955-H. II.
 Siemes, Johannes B.: Friedrich Schlegel als Vorläufer christlicher Existenzphilosophie.

With a view to the future of the spiritual world, in the midst of such a situation, I can not help asserting to be able to find a new way to autonomy in the Calvinistic doctrine of predestination and common grace, which points to a dimension that can only be reached by a conversion to "theonomy" —through the heteronomy of depending on the order of grace— and is entirely different from Kant's autonomous Reason.

On the Scope and Method of Intellectual History

by Masao Nakamura.

Intellectual history is, in a sense, a synthetic history of all cultural sciences. It deals not only with a history of systematized thought such as theology and philosophy, but with the laws of development under which thought, knowledge and values have been actually formed and developed, though not necessarily in certain definite patterns, in human mind. In other words, it deals with the problem how they have been influenced by and influencing on the natural environment, economy, politics and social conditions in which they have been formed and developed. In the demand for such an inclusive study as intellectual history, like in other new movements in cultural sciences, seems to have been clearly reflected the progress which has been made in the fields of cultural sciences and their newly-discovered research areas in the borderlands between various sciences. The four main problems in intellectual history pointed out by Prof. Baumer may be regarded on the whole to be appropriate.

The intellectual historian attempts, moreover, to combine the method of realists with that of idealists, attaching no less importance on literary non-cumulative knowledge than on natural scientific cumulative knowledge, and to try to find out a direction for us to follow, through a study of the history of Western thought of over two thousand years, not merely

as a history of the past as L. v. Ranke had done, but from a standpoint of the present in which we ourselves live.

Although we admit that both intellectual history and historical materialism are necessary and useful so far as they go, we cannot but acknowledge that those methods have serious restrictions in that they regard usefulness for the present as everything, and hence cannot well avoid the danger of distorting, under certain circumstances, facts of the past.